

長期呼吸器管理による慢性肺疾患の治療を行ない、呼吸状態安定と体重増加確認し 352 生日退院となった。今回の症例は難治性の経過より先天性リンパ管形成不全が合併していた可能性が疑われる。このような難治性乳糜胸の場合、適切なドレナージと栄養管理および呼吸・循環の維持が非常に重要である、と考えられた。

### 3 25 生日に脳室内出血を発症した低出生体重児の一例

榊原 清一・小嶋 絹子・小林 玲

原田 和佳・吉田 宏・伊藤 末志

鶴岡市立荘内病院小児科

新生児の脳室内出血は一般に超および極低出生体重児の出生後早期での発症が多いが、今回我々は 25 生日に脳室内出血を発症し、出血後水頭症に至った低出生体重児例を経験したので報告する。

症例は在胎 32 週 6 日、1755g で経膈分娩で出生した双胎第二子。出生後早期の管理中に特に重篤な合併症を認めなかった。25 生日（修正 36 週 3 日）に突然嘔吐、呼吸停止、徐脈、痙攣が出現し、頭部超音波所見より両側の脳室内出血と診断された。急性期管理後脳室拡大が進行し、出血後水頭症に対し髄液ドレナージ術の後に VP シャント術が施行された。

脳室内出血の明らかな原因は特定できなかったが、発症数日前からの無呼吸発作や、眼底検査や経腸栄養前の強い啼泣が脳室上衣下胚層の血管破綻に関与した可能性が考えられた。発症の好発時期でなくとも、脳室上衣下胚層の残存する時期には脳室内出血を来す可能性があることが示唆された。

### 4 小児科診療所での出産前小児保健指導（プレネイタルビジット）の経験

柳本 利夫・小田 良彦\*

やぎもと小児科

新潟市小児科医会\*

母親の育児不安の軽減などを目的とする出産前

小児保健指導が注目されている。今回、産婦人科医院と小児科診療所が連携して出産前小児保健指導を 47 件経験した。出産前小児保健指導の対象は、育児に対する不安の有無や合併症の有無には関係なく、妊娠後期の初産の妊婦とした。妊婦に小児科診療所を訪問してもらい、主として一般的な小児保健の指導を行なうとともに、出産後の電話訪問などのフォローアップを行なった。出産前小児保健指導を経験し、現在子育て中の母親へのアンケート調査では、出産前小児保健指導に対し「良かった」「役に立った」という感想が多く、「このような小児科医の活動は必要である」とする意見が多かった。

### 5 TRAP (Twin Reversed Arterial Perfusion) sequence における、胎児血管走行に関する検討

村越 毅・生野 寿史・渋谷 伸一

東條 義弥・鳥居 裕一

聖隷浜松病院総合周産期母子医療

センター産科

【目的】TRAP sequence における臍帯および病的胎児内の血管走行を検討した。

【対象及び方法】1995 年から 2001 年までに当センターで取り扱った TRAP sequence 4 症例において、超音波ドプラ法により胎内での血管走行及び血流パターンを評価した。出生後は、臍帯動脈からの血管造影および剖検にて血管走行を確認した。

【結果】4 例全例に出生前に臍帯動脈から下行大動脈にかけて逆行する動脈波形を確認できた。臍帯動脈から病児へ入った血管は膀胱外側の臍動脈から内腸骨動脈を経由し下行大動脈を頭側へ走行していた。臍帯静脈は病児より胎盤へ流出する波形であった。全例に静脈管の欠損があり、流出血管は下大静脈から膀胱の脇を通り臍帯へ走行していた。全例単一臍帯動脈であり、出生後に AA 吻合と VV 吻合が確認された。1 例に痕跡心臓及び固有の胎児心拍を認めたが他の 3 例の心臓は欠損していた。胎児心拍を認める症例では、病児固有

の心拍出は動脈ではなく静脈に拍出しており、定常波の静脈に病児の動脈波形を合算した特徴的な波形を示した。また、上述の所見は出生後の血管造影及び剖検にても確認された。

【結語】今回検討した4例では、いずれも静脈管の欠損を特徴としていた。また、痕跡心臓における胎児血流波形パターンは今までに報告されたパターンとは違う特徴的な血流波形であった。

## 6 Reproductive autoimmune failure syndrome (RAFS) の観点から見た妊娠予後改善に関する試み

田村 正毅・高木 偉博・夏目 学浩  
石井 桂介・高桑 好一・田中 憲一

新潟大学産科婦人科

近年、Reproductive autoimmune failure syndrome という疾患概念が提唱され、反復流・死産の原因としてだけでなく妊娠中毒症や子宮内胎児発育遅延の原因として抗リン脂質抗体の関与が注目されている。われわれは、反復流・死産症例、重症妊娠中毒症症例における抗リン脂質抗体の陽性率を検討し、一般妊娠婦人の抗リン脂質抗体と妊娠予後に関する前方視的解析などにより、その因果関係を指摘し、予防的治療を試み良好な成績を得ている。今回、当科の治療方針、予防的治療の実際、予防的治療が著効した症例の経過を報告する。さらに既往異常妊娠症例（重症妊娠中毒症などを伴い、超低出生体重児を分娩するに至った症例）で抗リン脂質抗体陽性であった15症例に対する予防的治療の成績と、既往異常妊娠症例で抗リン脂質抗体陽性であり予防的治療を要すると判断されるも患者の希望にて経過をみた4症例につき報告する。

## 7 30才未満妊娠婦人におけるヒトパピローマウイルス (HPV) 感染に関する多施設共同研究

高桑 好一・石井 桂介・田村 正毅  
田中 憲一

新潟大学産科婦人科

平成13年度厚生科学研究「妊産婦のSTDおよびHIV陽性率及び妊婦STD及びHIV感染の出生児に与える影響に関する研究」研究班

子宮頸癌の発症ウイルスであるヒトパピローマウイルス (HPV) がSTDとして注目されている。今回多施設共同により、30才未満の妊娠婦人についてHPVの陽性率を検討した。1185例中249例(21.0%)で陽性であり、30才未満の妊娠婦人の2割強にHPVの感染が生じていることが推察された。とくに～19才の年齢階層では39例中18例(46.2%)でHPVが認められた。また20才～24才の年齢階層でも241例中68例(28.2%)に陽性であった。一方25～29才では18.0%(905例中163例)の陽性率であった。この結果、～19才および20才～24才の年齢階層では25才～29才の年齢階層に比較し、有意に高率であった。さらに、クラミジア抗原、HPVを共に検索した症例について、複合感染について検討した。クラミジア陽性の51症例中19例(37.3%)にHPVが陽性であった。また、クラミジア抗原陰性症例1134例ではHPVは230例(20.3%)に陽性であった。クラミジア抗原陽性症例におけるHPV陽性率はクラミジア抗原陰性症例に比較し、推計学的に有意に高率であった。以上より、若年妊娠婦人でHPVの感染が高率であること、クラミジアとの複合感染が高率であることが明らかになった。

## 8 Sirenomelia (人魚体症候群) の症例について

須藤 寛人・山口 雅幸・福井 直樹  
菊池 朗・安田 雅子・安達 茂実

長岡赤十字病院産婦人科

人魚体症候群は両脚結合を示す大奇形であり、